

馬琴読本の研究

著者	洪 晟準
学位授与年月日	2016-06-16
URL	http://doi.org/10.15083/00075142

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 ホン 洪 ソンジュン 晟準

本論文は、史伝物を中心とした曲亭馬琴（1767～1848）の読本作品の特質について、人物造型の方法、史実と虚構の関係、小説理念としての勸善懲悪、等々の様々な観点から考察したものである。本論文の構成は、序論に続いて、第一章「前期史伝物読本の人物造型」が「『椿説弓張月』と崇徳院怨霊譚」等の三節、第二章「馬琴読本の創作方法」が「『月氷奇縁』の創作方法」等の四節、第三章「馬琴の理念」が「『石言遺響』に見える勸懲観」等の三節から成り、末尾に結論を添える。

第一章は、『椿説弓張月』の為朝、『俊寛僧都嶋物語』の俊寛と亀王、『頼豪阿闍梨怪鼠伝』の唐糸を取り上げ、それらの人物が先行作で描かれた人物像とはかなり異なること、例えば『俊寛僧都嶋物語』の俊寛は、一人島に取り残されて悲嘆にくれ同情を誘う先行作の俊寛像と違い、武人的な俊寛像へと造型しなおされているが、それは後半で俊寛が軍師の鬼一法眼となるという、馬琴独自の設定への伏線であったことを明らかにする。

第二章は、読本作品の創作に当たり、馬琴がどのような具体的な創作方法をとったのか、中国文献の利用、史実への虚構の加味、いわゆる稗史七法則の援用等の多方面から検討を加え、馬琴が作品に新味を出すために様々な工夫を重ねていることを指摘する。とりわけ、稗史七法則の中の「省筆」の方法による「偷聞（たちぎき）」の場面が設定されることによって、物語内容の重複を避けながらも、筋を複雑化することに成功していることを明らかにしたことは重要である。

第三章は、馬琴読本に見える「勸善懲悪」の理念について詳細に検討し、脇役の死の場面で強調される仁義八行の徳目とその後の物語の展開を規定していくこと、善悪は個々の登場人物で完結せず親から子へと引き継がれる場合があること、馬琴読本では「勸善」よりも「懲悪」が強調されるが、それは善人よりも悪人の描写に力点が置かれていることと表裏の関係にあること、等々の新しい指摘がなされている。

従来、馬琴読本の研究は、白話小説や軍記物語を中心とする典拠研究に比重が置かれ、創作方法に触れた研究も、稗史七法則や勸善懲悪論の理論的な分析にほぼ限られていた。本論文は、馬琴の読本諸作を丁寧に読み込むことにより、馬琴の人物造型や虚構化の手法を、作品の内容に即しつつ具体的に明らかにした初めての研究とあってよい。また、近時発見された馬琴晩年の自作批評集を使った本格的な研究としても初めてのものである。本論文ではやや言及が少ない後期史伝物の考察など、さらなる研究が期待される所もあるが、馬琴読本の内実を緻密な分析によって明らかにしたことは、研究に新生面を開くものとして高く評価できる。よって、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと判断した。